平成十九年度読書感想文コンクール作品集

もさく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教員図書部会

目　次

講　評・その他　一般科目　国語科教員　相本　正吾　……2

入選　第一位　『天国は待ってくれる』を読んで　制御情報工学科　三年　板井　依香　……3

入選　第二位　『手紙』を読んで　制御情報工学科　三年　松枝　美幸　……3

入選　第三位　『ライ麦畑でつかまえて』を読んで　都市システム工学科　三年　池﨑　愛子　……4

佳　作　『二つの悲しみ』を読んで　機械工学科　二年　下山　丸加　……5

〃　『オレンジデイズ』を読んで　機械工学科　二年　徳丸　拓矢　……5

〃　『包帯クラブ』を読んで　電気電子工学科　二年　吉山　和志　……6

〃　『博士の愛した数式』を読んで　制御情報工学科　二年　河野　史織　……7

〃　『もしも私が、そこにいるならば』を読んで　電気電子工学科　三年　石田　大貴　……8

〃　『鼻』を読んで　制御情報工学科　三年　河野　慎　……8

〃　『人間失格』を読んで　制御情報工学科　三年　牧　広平　……9

編集後記　学生図書委員長（制御情報工学科　四年）　鈴木　克也

校内読書感想文コンクール（平成十九年度）

講　評・その他

一般科目　国語科教員
相本正吾

本年度は、担当国語教員により各クラスから選ばれた優秀作及び自主投稿の作品を対象にして、教員図書部会委員及び学生図書委員による第一次・第二次審査、国語教員による厳正なる第三次審査を経て、三作（第一位～第三位）の「入選作」、七作（第四位～第十位）の「佳作」が選出されました。

栄誉ある第一位に輝いた板井さんの「『天国は待ってくれる』を読んで」は、我が子に宛てた夫妻の手紙というユニークな形式になっているこの作品を読んで、偽りなく語られた内容やその表現に板井さんは心惹かれ感動しています。フィクションのように見えながら人情味が溢れており、夫妻が交互に語りながら夫妻同士の会話にもなっているという作品の姿の捉え方や、自分もこのような人情味溢れるフィクションを書いてみたいという板井さんの末部の結びも秀逸です。

第二位の松枝さんの「『手紙』を読んで」は、弟の学費調達のために兄が犯してしまった強盗殺人という犯罪によってそのあとに弟までが差別を受け地位や生活も奪われていくという物語を読み、殺害事件は被害者の親族だけでなく加害者の親族までも苦しめ台無しにしていくという事実をあらためて知らされたと松枝さんは述べています。読書というものは私たちが日頃なかなか気付けないことを教えてくれます。

第三位の池﨑さんの「『ライ麦畑でつかまえて』を読んで」は、この名作を読んで池﨑さんは、大人の世界に触れて傷つく子供たちのこと、大人が子供たちのことを理解し認めてあげることについて考えています。主人公の少年ホールデンは優しくて純粋な子供であるとともに子供たちのことを思い助けていく大人でもあるのだという池﨑さんの捉え方はこの作品の根幹に触れていて鋭いと思います。

佳作となった七つの感想文も、読み取って考えたテーマやそれを表していく表現においてすぐれています。人のどんな傷に対しても包帯を巻いていこうと決意した包帯クラブのメンバーたちの奮闘の物語を通して私たちが知らぬうちに周りに負わせてきたお互いの心の傷や行き違いの治癒のことを考えた吉山君の作品、自分の鼻の形にコンプレックスを抱いていた主人公の物語を通して外見に悩む人のあり方について鋭く考察した河野慎君の作品、数式の美しさを愛した博士の話を通して身近にありながら日頃私たちが気付いていない美しいもののことを考えた河野史織君の作品、作中で触れられる大戦で息子及び父親の戦死の知らせを受けた二人の悲しみを受けとめて戦争が人々にもたらす代え難い不幸や平和の尊さのことを考えた下山さんの作品、対人恐怖によって人と交流ができない主人公の悲劇と同等の作者太宰治の苦悩の人生に思いをはせた牧君の作品、夢と現実の間で揺れ動く若者たちのキャンパスライフの物語を読んで目標を持って生きることの大切さを考えた徳丸君の作品、人の隠れた過去の秘密が表沙汰になっていくことの是非について考えた石田君の作品、いずれも、読む私たちに大切なことをいろいろと気付かせ考えさせてくれる感想文となっています。

出会い（邂逅）が人の生活を大きく変革していきます。すぐれた名作・名著を読んでいく読書の活動もそのうちの一つであり、その意味でも、機会があれば図書館や書店に足を運んでみること、読んでためになった本を知り合いに聞いてみること、そして、自ら好んで読書に取り組み、その本の内容や作者と大いに対話をして考え方を広め深め、かつ、その成果を苦心して文章にまとめてみることは、価値ある活動です。日頃のそういった読書・思索・作文の活動は、作成する読書感想文にそのまま成果として現れていきます。

４、５年生も含めて、自ら行っていく自主投稿も大いに歓迎です。学生の皆さんには日頃から読書と思索と作文にしっかり取り組んで今後入選していくことを期待します。

入選第一位

『天国は待ってくれる』を読んで

制御情報工学科　三年
板井依香

まずこの話はフィクションなのか。友人曰くフィクションらしい。しかし、読み終わった今の私には、作り話だと思えない。内容がどうだとか言うわけでない。ただ、この本でいう主人公が作者の作り出した人物であり、作者の演技だとは思えないからだ。

この本は、二人の人物が交互に書いている。夫妻だ。これは我が子宛に書かれた本だ。夫妻の幼児期、二人の出会い、夫妻の幼馴染みであり大親友である武志について聞いて欲しいとつづられたものだった。その武志が亡くなった後に書かれたものだった。二人は、思い出を語り続けている。まさにこの本は我が子へ宛てた長い長い手紙だった。私はまるで誰かの大切な手紙を盗み見しているような気分に陥った。そして、この夫妻の照れながらも真剣に語る姿が目に浮かんだ。

私は堅苦しい文字の並ぶ本が嫌いな人間だ。しかし、これは本でありながら手紙である。私は、話し言葉で語りかけてくるこの手紙に没頭した。なんとも親しみのある文章なのだろう。この本には人情が満ち溢れている。だから私はこの夫婦が架空のものだと思えない。始めに

「格好つけず美化せず、自分の醜い姿も正直に書こうと思う」

と書かれていて、確かに偽りなく書かれている。人間の汚さ、そして自己嫌悪。私自身が手紙に思いをつづろうとする時の書き方と同じである。また、

「自惚れているわけじゃないのよ。」

と前言撤回してあったり、子に読まれる時の照れや恥ずかしさが表現されていた。文章の中でも、母と父が会話をしていた。二人の会話が書かれているわけでない。二人は交互に思い出をつづっているだけなのだから。でも、その文章の向こう側で

「そんなこともあったね」

と顔を見合わせて、少し照れ笑いをしながら手紙を書いている夫妻が目に浮かぶのだ。だからどうしても、この夫妻が作者の演じたものとは思えないでいる。言ってしまえば、私はまんまと作者の思う壷にはまり込んでしまったのだろう。そう考えると少し悔しいな。本当に感動したから。

武志は本当にかっこよかった。素敵だった。作者が夫になりきって伝える武志。話の内容はありがちだ。でも、それは表現次第で大きく変わる。私も人情の溢れるこんなフィクションを描きたいなと思った。

入選第二位

『手紙』を読んで

制御情報工学科　三年
松枝美幸

弟思いの兄はある日、弟の大学資金を調達するために強盗しようと考えました。ところがお婆さんにみつかってしまいました。無我夢中でお婆さんを押さえ込み、ついには殺してしまったのです。

この物語はこの兄の強盗殺人により、弟の直貴が過酷な人生を送ることになってしまうストーリーでした。何の罪もない直貴が突然、兄の犯罪によって周りの全てを失ってしまうのです。どこへ行っても「強盗殺人の弟」という運命からは逃れられませんでした。直貴は兄と血が繋がっているだけで事件とは何も関係ないのに、なぜこんなにも差別を受けなくてはならないのだろうと私は不思議に思いました。真実を知ると急によそよそしくなったり、環境を変えられたり、夢を手離さなければならなくなったりしたのは決して直貴のせいではないはずです。しかし、物語を読み進めていく上で、私の考えに変化が生まれました。「差別は当然」これだけを聞くと直貴がただの被害者のように聞こえるかも知れません。ところが、それは違います。兄が犯罪を犯したことで直貴が差別され

ることは兄の罪の重さを、兄自身に思い知らせるという意味になるのです。兄がやったことは一見、被害者の家族達だけが苦しむように思えます。しかし、加害者である側の弟、兄にとっては大切な弟までも苦しめることになるのです。

最近、ニュースでは殺人や事故など、様々な事件が絶えず報道されています。今まで私は、このような事件のときはいつも被害者の方に目を向けて同情したり、加害者に対して怒りを持ったりしたことしかありませんでした。ニュースで取り上げられるのも私のように被害者側からの意見ばかりです。しかし、この本を読んだことにより、被害者と同じように、加害者の家族なども苦しんでいることがよく分かりました。加害者本人の代わりに謝罪に行く彼らは、どのような気持ちなのでしょうか。それはきっと、自分の家族が罪を犯したという事実に対する絶望や悲しみ、そして被害者へつぐないたくてもつぐない切れない苦しみの両方があるのではないかと思います。殺人を犯すことは確かに悪いことです。被害者のこれからの人生を全て奪い去ってしまいます。しかし、それと同時に、自分の家族の人生も変えてしまうことを忘れてはいけないと思いました。「殺人」というのはこれほどにも罪の重いものだということが分かれば、もっと犯行が減るのではないか、とこの本を読んで充分に考えさせられました。

入選 第三位

『ライ麦畑でつかまえて』を読んで

都市システム工学科　三年
池　﨑　愛　子

私は大人なのか？子供なのか？この本を読み、純粋に疑問に思った。大人と子供の狭間で苦しむ、という点が共通しているからだろうか、私は主人公ホールデンに親近感をいだく。だが、ホールデンと私には大きな違いがある。私は大人とも子供ともいいきれないが、ホールデンは大人であり子供であるのだ。

ホールデンにはすでに死んだ弟がいて、そして親戚その他の人達と墓参りにいった時のことだが、最中に大雨が降り、みんながあわててそれぞれの車に戻り、ラジオ等を楽しむのだ。ホールデン以外の全員である。

ホールデンはこの事が許せない。私は衝撃をうけた。私も結局は上辺だけで情の無い人間なんだと打ちひしがれた。私だったら間違いなく車に乗っていただろう。そしてそれをなんとも思わないのだろう。ホールデンは、非常に多感であり、優しく、純粋であるがゆえに傷つきやすい、そんな少年なのだ。

そんな彼は、幼い妹に夢を語る。「広いライ麦畑で小さな子供たちがいっぱい遊んでる。大人は僕だけで、僕は危ない崖っぷちに立ち、崖から落ちそうになる子供をつかまえて助けるんだ。僕がなりたいのはその、ライ麦畑のつかまえ役だけさ。」

子供は、自分が無垢であり傷つきやすいのだと自覚していない。だから、大人の世界を知り、受け入れることが出来ず、やがて社会に受け入れられなくなり、分厚い壁の前にあがき、傷ついていくものだと思う。だが今の私は、大人の世界を否定しようとも思わないし、だけど子供が傷つくのがしょうがないなどとは思えない。

非常に悲しい事だが、もう私には子供の感情を「理解」する事はできないのだと思う。

だから、私がライ麦畑のつかまえ役をしたならば、子供の速さについていけず、子供は崖から落ちてしまうだろう。だから、これから私が崖の下の大人になったとき、子供がもしも落ちてきたら、抱きとめる役になりたいと思う。子供の感情が「理解」できなくても「認める」ことはできるだろう。

自分を認めてくれている、見守ってくれている大人がいることは、すごく素晴らしい事だと思うから。今の自分がそれを望むように。

佳作

『二つの悲しみ』を読んで

機械工学科　二年
下山丸加

二つの悲しみ――それは、太った紳士と幼い小学二年生の少女の悲しみである。時は第二次世界大戦後、筆者が留守家族に兵士の死を伝えていた時の事である。毎日「死んだ」とばかりくりかえし、そう言うたびに体の内部に恐怖が走ると筆者はこの本の中で述べていた。現在では毎日のようにニュースで「殺人」や「殺された」「死亡」という言葉を耳にするが、今の私はもう、その言葉に慣れてしまい、そのように聞いても深い感情を抱く事はない。しかし、それは私だけに起きている現象ではないと思う。現在生きている人の大多数は同じように考えているのではないだろうか。もし、そうなら、昔と比べて今は、人々にとって命の重さが薄れて来ているのではないか。そう考えると、少し今の自分が恐ろしくなった。

さて、本の中の二つの悲しみに言及するとしよう。紳士の悲しみとは、息子の戦死である。彼はその事を聞くや、何も言わずにその場を立ち去っていった。筆者が後に見かけた時には、帽子に顔をつっこんで、帽子から水滴がしたたり落ちていたそうだ。一方、少女の悲しみとは、父親の戦死である。彼女は、父の戦死を知らされても、一粒の涙も流さなかった。それは、家で待っている幼い二人の妹たちのため、自分がしっかりしなくてはという思いからであった。この少女は下唇を血が出るようにかみしめ、肩で息をしながらそそくさと帰って行った。この二つの悲しみ――特にこの少女の取った行動に私はとても感動した。彼女がどんなにか大声で泣きたかった事か、まだ小学校二年生なのに――。そこで彼女を唯一支えていたのは、自分がしっかりしないといけないという子供なりの責任感だけなのだ。

戦争から六十年余りたった今、私たちには何ができるだろうか。何かできる事があるとすればそれは、戦争を体験した人たちの話を聞き、心の目で戦争を目のあたりにし、心にその恐ろしさを焼きつけることだろう。そして何より、今普通に家がある事、食べる物がある事、家族と共に過ごしている事、ましてや教育を受けられている事が当たり前ではないという自覚をもち、日々、今の生活、今の平和に感謝しながら生きていきたいと思った。そしてこの世界が今よりほんの少しでも、平和になってほしいという願いが心の底からわきあがってきた。

佳作

『オレンジデイズ』を読んで

機械工学科　二年
徳丸拓矢

僕は、読書感想文を書くに当たって「オレンジデイズ」という、かつてテレビドラマであったものを小説化した恋愛物、いわば現代の娯楽大作といえる小説を題材にしていいものか？と迷っていました。

しかし、その想いは、この物語を読み終える頃には、消えてしまっていました。なぜなら、この物語が、間違いなく文学作品と呼ぶに相応しい作品だと確信したからです。

この本の作者、北川悦吏子さんは、数多くのヒットドラマを世に送り出してきており、他の作品に、「ロングバケーション」「空から降る一億の星」「ビューティフルライフ」等があります。

僕がこの本を手に取った理由は、「オレンジデイズ」のテレビドラマを見たいと思いつつ見た事がなく、ならば小説で！と、思ったからです。

そんな軽い気持ちで手に取ったこの本を読んでいくうち、北川悦吏子さんの作り上げる「オレンジデイズ」の世界へとみるみるうちに、引き込まれていってしまいました。

大学四年という、大人と子人との境目で、揺れ動く心。これといった目標のないまま、なんとなく周りの流れに合わせて就職活動をする日々。そんな中、出会ってしまった「オレンジの会」となる男女五人の繰り広げる「キャンパスライフ」全てに於いてリアリティあふれる世界がそこには、ありました。

大学四年という人生の岐路に立たされ、次第に自分のやりたい事を見つけ、夢と現実の間で揺れ、しかし、それでもしっかりとした目標を見つけていく姿には、とても感動させられました。もちろん、恋愛小説なので、主人公と音を失ってしまった恋人との恋愛模様は、涙をさそう場面も多々ありました。しかし、それ以上の何かがこの小説には、込められているように思いました。

現在、ニートという人種が増加しています。そのような人達には、それなりの理由があるのだと思うので、その存在を否定する気にはなれません。たとえニートであろうとも、「しっかりとした目標を持つことが大事。」「若いということは、可能性は無限であるということであり、全ての若い人に目標を持ってもらいたい。」そんなメッセージが込められているような気がします。

切ない中にも「ホッ」と心温まるようなストーリー。このような素晴らしい本に出会えた事に感謝し、又、自分の目標をしっかり決める事を心に誓う、良い機会となりました。

佳作

『包帯クラブ』を読んで

電気電子工学科　二年
吉山和志

傷とは、誰もが経験し、持っているものである。中には、他人から見れば何てことないささいなものもある。だがそれは、本人から見れば紛れもない傷であり、今もその人自身を傷つけ血を流しているかも知れない。だからこそ、それに気付いた包帯クラブのメンバーは、どんな傷にでも包帯を巻き治療することに決めたのだろう。なぜなら傷は、それを与えてしまった者と、受けた者と、理解し治そうとする者にしか感じとれないのだから。私も傷に関しての経験はいくつもある。無意識のうちの分も数えると、それはもう無数にあるだろう。そしてその経験は、誰もがあたりまえに過ごす日常の中に含まれているのだ。その中で最も心に残っているのは小学三年生の時のこと。

その日は二つの友達のグループと一緒に遊ぶ予定だった。私から見ればみんな知り合いの友達ばかりだったが、その二つのグループ間には互いに初めて会う子もいた。遊び終わってそろそろ帰ろうかという夕方、その中の二人がケンカを始めた。理由は口ゲンカだった。とにかく見た時にはもうケンカの最中で、私達はとりあえずそれをやめさせて各々の家へと帰った。でも当時の私達は何かすっきりせず、何日か考え、後日その二つのグループを再び遊びに誘った。そしてそのケンカした場所へ行き、しっかりその時のことを話し合い、互いに仲直りした。その後はすっかり元通りに仲良く遊ぶことができた。

この日の体験を今になって考えると、これは包帯クラブにも通じる点があるように思う。まずはケンカした時のことだが、この時は張本人である二人の心にはもちろん、それを止めた周りの人の心にも傷は残ったのだ。そして次に仲直りした時。この時私達は、ケンカした二人の傷のことをしっかり考え、治したいと思った。そして無事、その二人の、そしてその周りの私達の傷も治ったんだと思う。

人はみな、自分の傷を他人に知ってほしい、一緒に治すのを手伝って欲しいと求めている。ワラは、

「知ることだけでも良い。知っておくだけでも。救えなくても知らない振りをするわけにはいかない。自分の傷を知ってもらっているということだけで、明日もまた生きていける。」

と言っている。その通りだと思った。知るということは治療の第一歩なんだ。そして包帯は、一つの傷に関わる全ての人をつなぎ、包み込んでくれる愛の治療薬。何者の、どんな傷も分け隔てなく癒やしてくれる魔法の道具なのだ。世界中のあらゆる場所にいる人々が心に同じよう

に包帯を持ち、互いに巻きあっていったら。互いを知って理解し、日本中、世界中に包帯を巻いていったら、ワラの言う様な包帯に巻かれた地球ができあがるだろう。そしていつの日かその包帯が取れ、全ての傷が治る日が来ると思う。

佳作

『博士の愛した数式』を読んで

制御情報工学科　二年
河野史織

47歳のある日、車を運転していて事故に遭った博士。目が覚めると自分の部屋で寝ている。目の前にある背広には、クリップで留められた無数のメモ用紙がある。自分は既に64歳になっている。毎朝自分の書いた文字によって病を宣告される。

「僕の記憶は八十分しかもたない」

まだ若いせいか、僕にはその苦しみをぼんやりとしか想像できません。しかしそれは、彼がそうさせているのではないかとも思います。彼の瞳は理想をまっすぐ見つめ、自分の苦しみを他人に見せようとしませんでした。

博士は数学者でした。家政婦の「私」とその息子に数学の話をするとき、彼は自慢するのではなく、ただ純粋にその数字の美しさを味わうのです。美しいと思い込ませるのではなく、美しさの発見を手伝う立場だったのです。博士の話を読み進めていく内に、僕も数学を美しいと思うようになっていました。

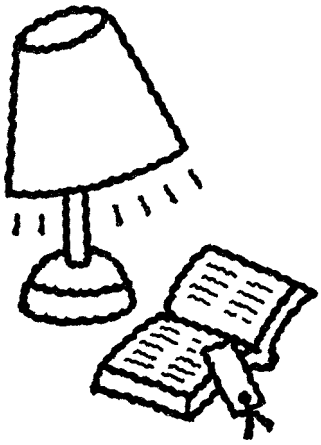
彼は「なぜ星が美しいのか誰も証明できないのと同じように、数学の美を表現するのも困難だ」と言いました。僕はこの言葉に考えさせられました。それを美しいと思うかどうかが問題なのではなく、それの持つ美しさに気付くかどうかが問題なのではないでしょうか。星の美しさは澄んだ夜空を見上げなければ分かりません。同じように数学の美しさも、自分の力で目の前の謎を解き明かすまで分かりません。美は受け取るものではなく、自力で発見するべきものなのだと思いました。

博士は数学の美しさに気付いた人間の一人に過ぎません。永遠に不変で矛盾が無く、それでいて謎のベールに包まれている。それぞれの数に意味があり、お互いに深く繋がり合っている。そんな数学の姿は、彼が見つけた美しさであり、彼が求めた理想の形なのだと分かりました。

理想というものは普段、現実に無いものとして扱われます。しかし、博士が最も美しい数字だと考えた素数は、「私」が言っていたように「ありふれた風景のどこにでも潜んでいた」のです。今まで僕は、美しいものとそうでないものがあるように思っていましたが、本当は全てのものに美しさがあるのではないでしょうか。何か別の事に気を取られるあまり、現実の中にひっそりと姿を現している理想を見落としているだけなのではないでしょうか。

博士は八十分しか新たな記憶ができないという辛い現実にぶつかっていました。そんな中で彼が穏やかさを保つことができたのは、目の前の小さな理想の種をまっすぐ見つめて惜しまず愛を注ぐことができたからだと思います。

辛い現実を前にして、何をすればいいか分からなくなった時、理想の形というものは道しるべになるのだと分かりました。決して理想どおりではない現実を生きる中でも、博士のように、自分が見つけた美を大切にする心を育て続けていきたいと思います。



佳作

『もしも私が、そこにいるならば』を読んで

電気電子工学科　三年
石田大貴

私はこの本に出会いタイトルに惹かれ選らびました。以前からこの本を書かれた片山恭一さんの作品は、表現の仕方や話のあらすじが好きでよく購入していました。そのような経緯もあり、今回この本と出会ったのです。

この物語は、母と娘がスキューバダイビングに出掛け、海の中で母が事故にあう所から始まります。通常ダイビングは、二人一組で行うのですが、その時ばかりは海の条件が悪く、母だけが事故にあい植物状態となる。その後病院に一人の男が現れる。家族でさえも全く知らない、そして何も語れない母を知っていて、馴れ馴れしい男。しかし娘は少しずつ知る事になる。その男について、そして母の過去について。その後、母は亡くなるが、色々な現実を受け止めながら娘は生きていくというストーリーである。

この物語のキーワードとなるのが『秘密』であろう。人には言えない過去、直面している現実を、誰でも必ず持っている。しかし家族となるとなかなか隠し通すのも難しい。その中で母は本当に知られたくなかったのか、もしくは単にリセットしたかったのではないかと読み取れる。しかしどちらかというと、後者であるように思う。ここまで家族と暮らしてきたという事は、それなりにその環境を受け入れているだろうし、もしそうでなければもっと他に選択肢があっただろう。しかしながら、もし私が主人公である娘と同じ立場であったならば、なんだか悲しい気がする。知りたくもない家族の過去を知ってしまったつらさ、そして逆を言えば何も知らなかった自分。どういう結果にせよ、死者は何も語らない。形あるものだけが残って、生きていく周囲の人間は、その後片付けしなければならない。母は本当に大きなものを残していった。

現代社会では『秘密』という概念が減ってきた印象にある。人は言いたい事を言い、過去を売り物にする。それによって事件が起ったりもする。秘密にするのかしないのかは、個人の考え方、生き方によって異なると思うが、その選択によっては何かが残ったり、起きたりする事を同時に考えねばならない。

今回この作品を読んで、日頃自分が口にしている事、していない事の『重さ』をあらためて認識させられました。

佳作

『鼻』を読んで

制御情報工学科　三年
河野慎

世間では「コンプレックス」を抱えている人は少なくないだろう。背が低い、スポーツが苦手だ、といった小さな事に劣等感を感じることはあると思う。それゆえに周囲の視線が気にかかり懐疑的になってしまったり。この小説「鼻」で登場する禅智内供は、一際大きなコンプレックスを感じていた。それは彼の顎の下まで下がる長い鼻にあった。

内供の鼻と言えば、世間で知らない者はいない程有名であった。彼の長い鼻はとても不便であり、またその鼻により彼は自尊心を傷つけられ、苦しんでいた。そのため、内供はあらゆる手を打って、鼻を短くしようと試みることにした。最終的に鼻を短くすることに成功した内供は今後鼻や周囲の目を気にすることなく人生を歩むことができると信じていた。しかし、事は思うようにいかなかった。鼻が短くなったことにより、一層可笑しな目で見られるようになってしまったのである。

この小説には、二つの矛盾した人間の心の感情を述べている。一つは、人が不幸を切り抜けたら第三者は何かしら物足りない気分になるこ

と。もう一つは、それにより、消極的ではあるが不幸を乗り越えた人に対して敵意を抱くようになることである。私はこの芥川龍之介の人間に対する評価に共感した。なぜなら私はこの一文を否定できない、当てはまるのでは、と思ったからである。人間、不幸を乗り越えてこそ幸福があると思う。内供は念願の短い鼻を手に入れ、同時に幸福を得た。しかし他人にとっては、自分は不幸であるのに先を越されたなどといった感情を抱いてしまい、内供を嘲笑うような言動に移ってしまったのではないかと考える。この矛盾した二つの感情を取り除けと言われても簡単なことではないだろう。ただその感情を抑制できる力を身につけることができれば、陰で他人を否定するような卑怯はなくなるであろう。内供はその後、元の長い鼻を取り戻すことができた。最後の一文に、

「こうなれば、もう誰も笑うものはないにちがいない。」

という内供の一言がある。結局は元の鼻、本当の自分が良かったのだ。人それぞれ違った個性を持っているがゆえに世の中が成り立っていると言っても過言ではないだろう。

普段本を手にすることのない私が読んだ短編小説「鼻」。短編ながらもその内容に共感した私は黙々と読むことができた。鼻を題材とした変わったものだったが、そこに描かれた人間の汚さや、一つしかない個性、自分の大切さを本を通して学ぶことができた。今後少しずつでも本の世界へ手を伸ばしていけると良いと思う。

佳作

『人間失格』を読んで

制御情報工学科　三年
牧　広平

僕がこの本を選んだ理由は、非常に有名な作品であるのに今まで読んだことが無かったからである。また、僕は普段あまり本を読まず長い小説に慣れていないので、あまり長い小説でなかったことも僕がこの本を選んだ理由の一つとなった。

この小説は私小説の形式をとったフィクションとされるが、作者である太宰治の人生を強く反映しているため自伝的な小説であると見なされている。表面上は面白おかしくおどけているが、内面では他人に深い恐怖を抱いているため本当の自分を誰にもさらけ出すことのできない主人公、大庭葉蔵の人生を主人公自身の視点で描いた小説である。

物語は主人公の第一の手記・第二の手記・第三の手記に分かれており、第一の手記は葉蔵の幼少時代、第二の手記は中学・高校時代、第三の手記はそれ以降について書かれている。葉蔵は幼少時代からおどけた子供で、学校でも人気者であり、友達も多いが、いつも他人を恐れているため心の底から気を許した親友は一人もいない。これは小説の最後まで同じである。他人とは少し違う考え方を持っていたことや、幼少時代の女中や下男による性的虐待によって他人を自分を同じ目で見ることができなくなり、他人を極度に恐れるようになり、また、それらが原因で社会から疎外されてしまうのである。

ついには高校時代から、他人との関わりや世の中から逃れたくなり、自殺未遂を繰り返したり、薬物中毒になったりしてしまう。これはまさに太宰治の人生と同じである。この小説では主人公・葉蔵の苦しみが語られているが、それは同時に作者・太宰治の苦しみでもあったのだろうと僕は感じた。

物語の最後、薬物中毒になった葉蔵は入院することになる。数ヶ月の入院生活ののち、故郷に引き取られた葉蔵は廃人となってしまう。廃人となった葉蔵は、もう自分には幸も不幸もなく、ただ時間が過ぎていくだけなのだと語り、手記はそこで終わっている。この後葉蔵がどうなったのかなどは一切書かれていない。だが、多くの辛い過去があった末自分を傷つけ、廃人となった葉蔵が立ちなおることは少なくともないだろうと感じた。

また、最終回の掲載直前に太宰治は自殺している。このことが、ただでさえ暗く衝撃的なこの小説の印象をさらに強調している。この小説

が太宰治の一生を描いているならば、葉蔵は生きる意味を見つけられず結局は自殺してしまったのかもしれない、と思った。

編集後記

学生図書委員長（制御情報工学科四年）
鈴木克也

他人の書いた文章を読む。それも、本や小説ではなく、作文を読む。学校の先生にでもならない限りは、そう経験できるものではありません。そんな事をしみじみ思いながら、拝読させていただきました。

ここで少し、感想文を読んでの感想を述べさせていただきます。入選作品のどれを読んでみても、文章構成や用いられている言葉などに、書いた人特有のくせみたいなものが現われていました。当然と言えば当然の事なのですが、それを探し出すというのも、作文を読む醍醐味ではないかと思います。また、全体を通して言える事ですが、どの作品も、現在の社会情勢や自分の境遇と照らし合わせた感想が書かれていたように感じられます。それだけに、読んでいて共感を覚えるものも多く、優劣つけがたいと思うことも度々ありました。

さて、このコンクールの審査は、図書部会の先生と国語科の先生、学生図書委員によって行われます。一度とて入選したことのない私が、審査に加わって果たして良いものかと悩ましくもありました。しかし、学生が審査するのはあくまで順位だけです。ですから、もし順位をいぶかしく思われたとしても順位は気にせず、最優秀作品か佳作かに関わらず、同じように選ばれた優秀作品である、という見方をしていただければと思います。

最後になりましたが、二〇〇八年一月二十四日木曜日に、図書委員会主催の読書会を行ないます。今回の課題図書は、青木和雄さん・吉富多美さん原作の「ハッピーバースデー」、石田衣良さん原作の「エンジェル」です。興味のある方の参加をお待ちしております。

「もさく　第三十五号」

発行日　平成二十年一月十日

発行者　大分市牧一六六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教員図書部会

印刷所　丸徳印刷株式会社
住　所　大分市新貝四－五十
電　話　〇九七－五五八－七七三七